

令和7年産の水稻の作付けに向けた土づくりについて

県内水田は土壌pHが低く、有効態ケイ酸や交換性加里が少ないほ場が多くなっています。さらに、近年は、登熟期間の高温により、「コシヒカリ」を中心に白未熟粒や胴割米の発生がみられます。

このため、高品質な令和7年産米の生産に向け、高温等の気象変動に打ち勝つ米づくりの土台となる秋の土づくりが徹底されるよう、指導願います。

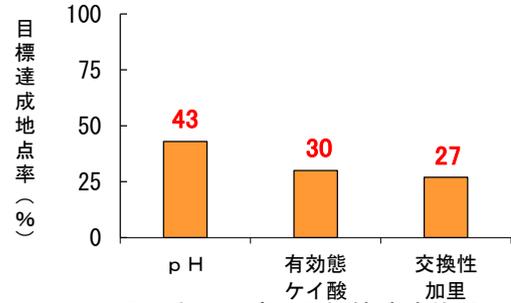


図1 県内水田土壌の目標値達成状況

注1) 農業研究所 定点調査

注2) 9巡目 (R元~4)、44か所

1 土壌改良資材の施用

- (1) ケイ酸質資材を確実に施用する。
- (2) 交換性加里が目標値に満たない場合は、加里を含む資材を施用する。

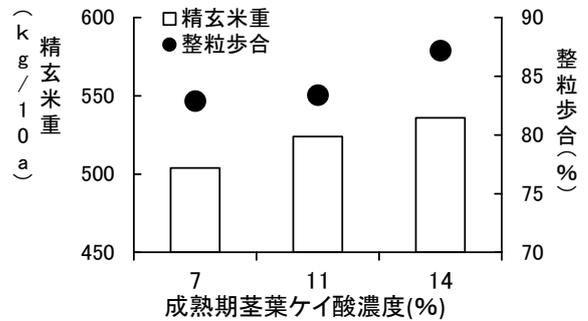


図2 成熟期茎葉ケイ酸濃度と精玄米重及び整粒歩合の関係

注) H21 農業研究所

2 堆肥等の有機物の施用

- (1) 腐植や交換性加里の増加を図るため、堆肥を積極的に施用する。なお、堆肥の施用量は、施用履歴や堆肥の肥料成分に応じて調整する。
- (2) 堆肥の確保が困難な場合は、発酵鶏ふんの施用や地力増進作物の作付けを行う。

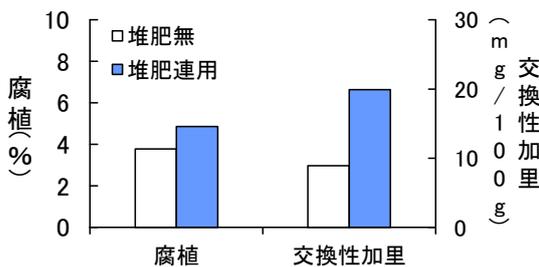


図3 牛ふん堆肥を連用したほ場の腐植及び交換性加里含量

注1) H30 農業研究所

注2) 牛ふん堆肥1t/10aを7年間連用

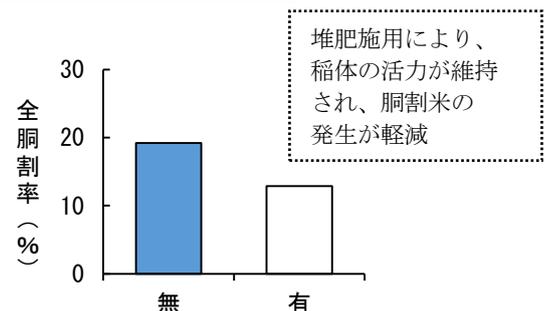


図4 堆肥施用と全胴割率の関係

注1) H12 農業試験場

注2) H10・11に牛ふん堆肥4t/10a施用

3 秋耕の実施と稲わらや籾殻のすき込み

- (1) 水稻の収穫後は、ひこばえが出穂する前で、気温が高い9~10月までに深さ10cm程度の浅めの秋耕を行い、稲わらや籾殻をすき込む。
- (2) 秋耕後は、排水溝の設置と深く掘り下げた排水口への連結を行い、ほ場の乾きを促進し、稲わらや籾殻の腐熟を図る。

秋の土づくり運動期間 (9月15日~11月15日)